

烏森トレッキング回想記

第十八回

行程：12月1日（土）

伊勢原駅—大山ケーブル駅—追分—下社—二重滝—見晴台（770m）（昼食）

—下社—

追分—

宿／旅館ますだ

12月2日（日）

宿—伊勢原駅—秦野駅—震生湖—秦野駅

メンバー：山田、吉川、小林、磯崎

9月の熱風猛暑が続く中、今年の紅葉は日照時間に恵まれて色付き鮮やかと聞かれ、行き先には迷うも、秋の山歩きは、早い時点から“紅葉巡り”と決める。

ただ、10月に入ると急に冷え込みが厳しくなり、色付く前にくすんでしまうのではとの懸念も伝わるが、今更変えられるかと猪突猛進、烏森会では初めての「丹沢」を案内する。

【余談51】神奈川県西部に広がる丹沢山塊は、アルペン登山入門の山と云われ、多くの愛好家に親しまれている。

山群の標高そのものは2,000mにも届かないが、山塊は大きく、急峻な尾根道は展望に優れ、アルペン登山を十分に堪能させてくれる山容である。

しかし、その一方で、山深いがためバス停から山麓までのアプローチが長い（1時間前後）のは辛く、また、山そのものの崩落現象が至る所に見られ、緑が少ないのは中高年ハイカーの訪問を躊躇させる要因になっている。

米本氏は所用で、森氏は仕事の調整が付かず欠席。

早朝の小田急／伊勢原駅に、山田、吉川、小林氏の順に到着し、愛妻弁当持参のY氏を除き、各自弁当を整えて、勇躍、大山ケーブル下行き臨時バスに乗り込む。

車内は現在が紅葉の盛りとばかりに満員御礼。

「社務局入口」バス停が近づき目を凝らしと、道の右手に“ますだ”の駐車場看板を見つける。

大山の山麓は人で溢れ返るが、周囲の樹々は紅葉に燃え、歩く駒の参道脇には「柿」や「柚子」等、秋の実りが廉売され、つつい喜びほくそ笑む。

運よくケーブル・カーには直ぐに乗車でき、瞬く間に下社に到着、早、大山登山の1／

3を終える。

生憎の天候に伊勢原、秦野市街や相模灘の展望は今一つであるが、下社のモミジは見事な紅葉鮮色を披歴し、辺りにシャッター音が絶え間なし。

白く輝く石段を上り、阿夫利神社下社に参拝。大山の宮水をガイドするも意外や人気なし。

売店の脇道を下り、二重滝を見遣りながら、なだらかな山道を登り見晴らし台へ。

それでも今回の山歩きでは最も急進な上り坂で、“ひいふう、ひいふう”合唱しながら、なんとか到達、一挙に展望が開ける。

見晴らし台は人の波。西正面に座す大山（1、251.7m）は雲に山頂を隠すが、遠くに大山三峰（934.6m）が幽かに山容を表わし、嘗て急坂に転倒したことはおくびにも出さず、指さして案内する。

次のスケジュールは、早、昼食。

運良く木テーブルが確保出来、早速湯を沸かして、また、「カップ・ヌードルビッグ」を取り出し、他のメンバーには徳用味噌汁を配る。

周囲の姦しさに負けじとばかりに、大声を張り上げて互いの近況を語り合い、旨い旨いと健康を喜び合う。

昼時を過ぎる頃には、いつの間にか辺りは静かになり、心地良い微風についまどろみ始めるが、そろそろとばかりに秘話をの公開、さあ聞いとくれ！

今回の宿探しには何とも難渋した。

適当なガイドブックがなく、図書館で大山地区の宿ガイド一覧表を借りるが、住所はすべて大山〇〇番地表記で、地図を見ても所在場所がまったく解らず、どこを選んで良いか見当が付かない。

えいままよとばかりに、若い地番に架電すると、すべて満員御礼であるばかりか、中には、“大将、紅葉が盛りのこの時期、今頃申し込んでもそりゃ無理と云うもんだよ！”と冷たくあしらう所もあり、最初の内は、“今が盛りか”とほくそ笑んでいたが、3軒も断られ、前述の様に突き放されるとついつい弱気になり、“いまの時期、丹沢は無理なのか”、“今回のトレッキングは諦めるか”、“とついついしょぼくってしまう。

それでもメンバーの輝く眼の輝きを思い起こし、“多少遠くても”とか、“ここで断られたら”と大山922番地に電話を入れると、何と、“ご用意出来ます”と、少し低いトーンでの応接、場所を訊ねると、“バス停社務所入口下車直ぐです”と有無を云わせぬ応答、社務所なら阿夫利にさほど遠くはなからうとついつい予約をしてしまい、後で地図に社務所を探す。

2日前の木曜日に、最終の人員を連絡すると、相変わらず低い声で、“解りました”と渋い返事、何となく社務所とケーブル駅との距離が離れていく。

ところがどっこい、前日夜、女将から電話が入る。何と美しい日本語か！

“今般の当館ご利用、誠に有難うございます。御懸念に在ります当方への御足の件でございますが、当方関係先にお送り申し上げるよう申し伝えました。登る道中に、「塚本土産店」なるお店がございますので、どうかお声をお掛け下さいませ。お互い助け合っている仲ですので、御遠慮は御無用に願います。明日は晴れそうです。お会いするのが楽しみです”

ところだが、「塚本土産店」なるお店がどこに在るのが解らない。参道途中の土産店の中か、ケーブルを上った後の下社の近辺か、そうかと云って、こんな楽しい話を事前に漏らす訳にもいかない。止む無く割引になるケーブル往復切符も利用せず、ここまで来たが、皆はどう思う？

意外や、白けたムードが漂い、下山の準備に取り掛かる。振り向くと大山山頂の雲が去り、“あれが大山のてっぺん”と話題を逸らす。

来た道に戻る。途中、小林氏が木の根に足を取られ転倒するも、山田氏の機敏な対応に何事もなし。

暗黙裡に下山を合意し、神社下の見事な紅葉を背景にして皆でデジカメ！

かつて活躍した我がアナログカメラは今日もザックベルトにセットされているが出番はなし。

【余談52】カメラのデジタル化移行スピードには何とも驚いた。

すべては技術革新の凄さで、プリント印刷技術の平準化等、アナログ写真が有す優位性をあっと云う間に克服し、デジタル一眼レフの登場によりいとも簡単にアナログ山を寄り切ってしまった。

未だデジカメを手にしらないのは、余りに合理的過ぎるからである。

「塚本土産店」はケーブル下の参道上手に位置し、直ぐに見つかる。

店の女に女将の言を伝えると、何故か要領が得られず迷惑そうな対応、何とも不快で嫌なら結構とも思うが、取りあえずはお茶をと薦められ、店内の立派な木テーブルに荷を降ろす。

その間にと、「柿」と「柚子」を求めて石段を駆け下るが、計算違いで参道入り口まで下ってしまい、何ともはや・・・。

結論的には、店主らしき男性に送ってもらうが、ジレンマにあるのか愛想はなし。

「ますだ」は大山街道脇の小道を上って直ぐの、周囲を雑木と竹林に囲まれた山麓の宿。小田急協力店の看板が昔日の栄華を語るが、現在はすっかり世俗を抜け、雅やかにひっそりと佇む。

気取らない女将と如才ない年配女性に迎えられ、玄関階上の部屋に荷を降ろす。

差し出された宿帳について緊張するが、年も隠さず丁寧に記帳、まさに当館の迫力と云うべきか。

泊り客は我々だけか、宿全体が静寂に包まれ、竹林を抜ける風が涼を誘う。

あれ何とも嬉や、自室での宴。烏森会では初めてではないかと記憶を手繰るも定かにはあらず。柚子入りポンズで云々と言いながら、彩豊かな小鉢の中に大山名物、「湯豆腐」を探すが見当たらず。

宴の仕切り役は先ほどの年配女性、聞き上手な上に話上手で艶話を含めたあらゆるジャンルに対応し、場を盛り上げる。

途中、女将が挨拶に登場。電話での印象通り、物静かな感じの女で、主に台所を担当しているとのことであるが、意外や、温厚そうな風貌。

秋の夜長はあっと云う間に更けていき、皆が寝入ったのは2：30AM頃。

翌日、7時を過ぎても誰一人起きる気配はなし。

眠い眼を擦りながらカーテンを引くと、窓外には明るい秋の朝。眼前に広がる竹林に、まるで葉音が聞こえるかの様に枯葉が舞い散り、思わず雨戸を開いて耳を傾けるが、風の音すら聞こえず。

堆高く盛られた地表の枯葉に、ザックザックと歩く音を想いながら、丹沢の秋の終わりを知る。

朝食に湯豆腐が並べられ、一声発してボリューム溢れるメニューを平らげる。

未定であった本日の行程を、関東大震災により出来た日本一新しい自然湖、秦野の「震生湖」と提案するが、吉川、小林両氏の腰は定まらず、早、自宅に帰るコースの算段を始める。

宿を発ち、社務所入口バス停から伊勢原駅に。

駅に繋がるビル階上の喫茶店に入り、良宿であったと褒め讃えながら、しばし歓談。

意志の固い両名と別れ、丹沢登山の拠点駅秦野に移動。

改札口前のコンビニで昼食弁当を購入し、準備は万端、いざや向かわん。

ところが、便数の少ないバスは出たばかり、止む無く、駅近くの名水、「弘法の里湯」を汲み、後は奮発してタクシーで向かう。

小高い丘上に現れた「震生湖」は周囲1kmの小さな湖。

湖畔の至る所で釣り人の姿が見られ、雨が降るように落葉が舞い散る湖面に糸を垂れる。ヘラブナを始め約12種の魚類が生息すると云う。

紅葉は昨日の下社に比し、低地である分、くすみが進んでいる様にも見えるが、抜ける青空が鮮やかさを補完し、秋色を十分に堪能する。

途中、親子で耕作する畑地の納屋片隅を借り、湯を沸かして昼食。

午後は断層後を訪ねんと歩き回るが、人に訊ねても案内看板を見ても終に解らず、辿り着いた丘上から秦野市街を眺め、これなら歩いても行けると帰りのバス時刻チェックを無駄にし、坂道を下る。

ぶらぶら歩きで、駅まで約25分。

奥多摩／青梅線に比し、便数で数段と勝る小田急線に乗り込み、今回のトレッキングも無事終了。山田氏は厚木で八高線に乗り換える。